

ポーター・ジョル幼児教育プログラムによる発達遅滞乳幼児に 対する早期訓練

山口 薫 東京学芸大学教育学部

目的 「ポーター・ジョル幼児教育プログラム」を0歳からの発達遅滞乳幼児に適用し、このプログラムの臨床的妥当性を検討するとともに、早期対応の効果の評価を行うことを目的とする。

方法 (1)対象児 昭和59年2月現在、われわれの療育プログラムに参加した発達遅滞乳幼児は、相談のみの事例も含め107名である。そのうち現在継続中の事例は78名(男児50名、女児28名)である。全対象児中60.7%をダウン症児が占める。

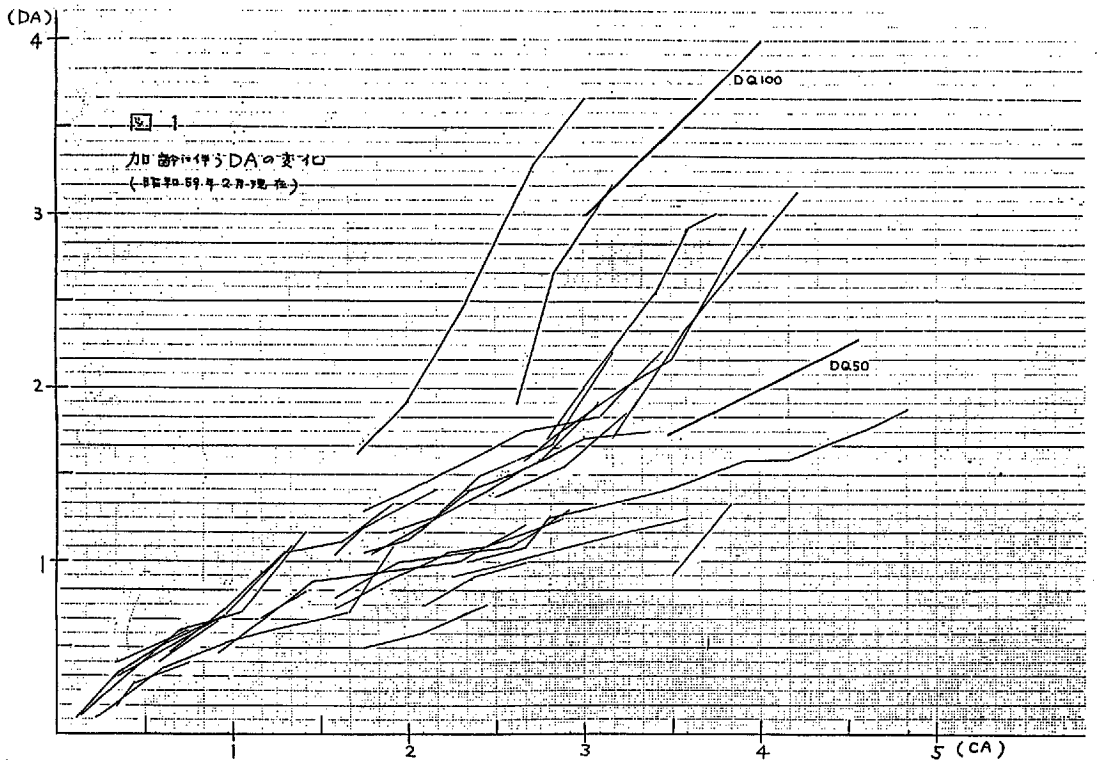
(2)指導手順、療育指導は原則として週に1回、東京学芸大学附属養護学校と杏林大学病院および主婦の友ポーター・ジョル発達相談室の3か所で実施した。指導の手順は次の通りである。母親は上記のいずれかの療育場所に子供を連れてくる。初回来談時には、生育歴・既往歴・相談歴等を聴取し、チェックリストによって最初のアセスメントを行

う。それに基づき、いくつかの発達領域において行動目標が選定され、一週間の療育プログラムを母親に渡し、家庭で母親による訓練を実施させる。一週間後、前週の指導効果を評価するとともに次週の療育目標を設定する、という手順を繰り返す。また、必要に応じて課題分析によるステップ指導を行う。

(3)効果の評価 ほぼ2か月間隔で、達成課題を発達経過表に記入する。また、3ヶ月に1回、標準発達検査(津守・稲毛式)を施行した。

結果と考察 図1は加齢に伴うDAの変化を示したものである。発達遅滞児の多くは年齢の増加にもかかわらず、DAが停滞するが本研究では著しい停滞傾向は認められなかった。

加齢に伴うDQの変動を示したものが図2である。CAが低いほどDQの変動が激しくCA15カ



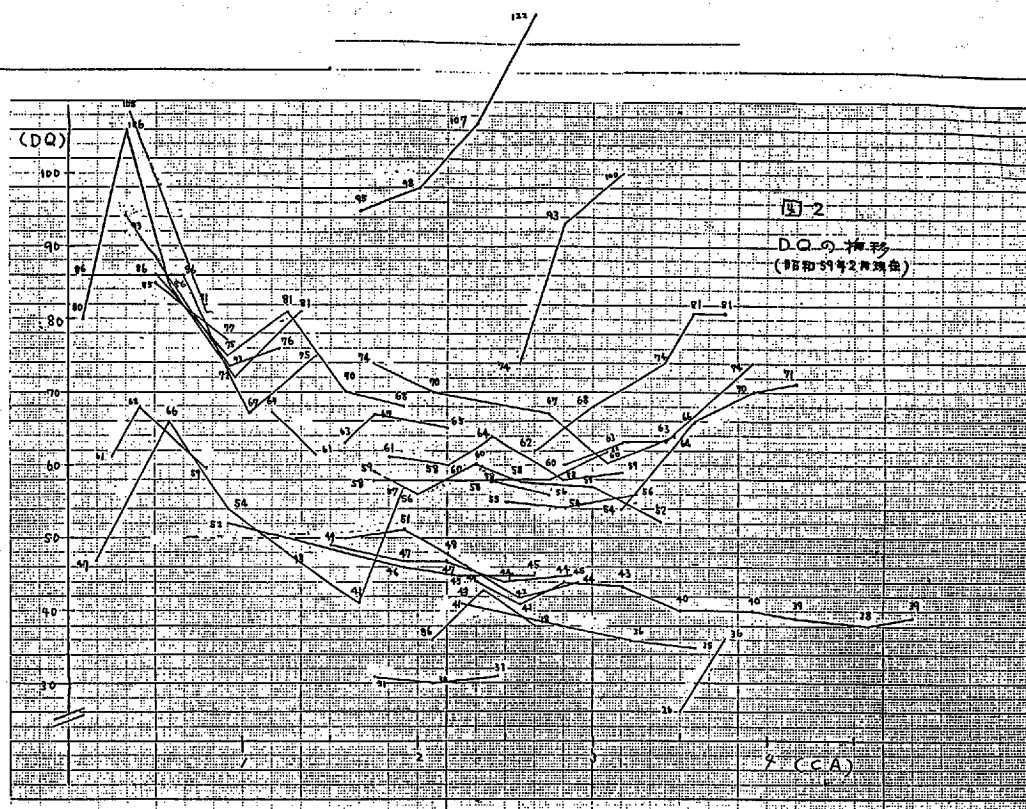
月を過ぎると DQ の値は比較的安定する。そして、とくにダウン症の何事例かが 3 歳近くに顕著な

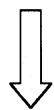
DQ 上昇がみられた。また総体的にみると指導開始月齢が早いほど DQ の上昇勾配は大きいようでもあるが、その推移には個人差が大きい。

プログラムに参加した対象児全員が順次確実に課題を達成でき、一方、的確に子供の発達を促す働きかけができるようになった親が増えてきてい

る。これも早期療育の効果の表われであると思われる。

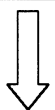
今後の課題 次の諸点を今後の分析課題とした。
1) 障害のタイプによる効果の違いがあるか。
2) 指導開始月(年)齢による違いがあるか。
3) 指導の頻度による違いがあるか。4) 親の養育態度による違いがあるか。





検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的「ポーター乳幼児教育プログラム」を0歳からの発達遅滞乳幼児に適用し、このプログラムの臨床的妥当性を検討するとともに、早期対応の効果の評価を行うことを目的とする。